

文化的景観に着目した南阿蘇地域の社会資本整備 に関する地域調査研究

田中尚人

1. はじめに

1.1 調査の背景と目的

研究対象地である南阿蘇地域は、穴あきダムである立野ダムの建設にともなって、大きく変容する可能性がある。自然環境豊かな阿蘇地域の南半分を占め、また交通の要衝でもある立野地区を含む南阿蘇地域は、他の中山間地と同様に、過疎化、高齢化などの問題を抱えながらも、文化遺産としての世界遺産登録を目指して、様々な取り組みが行われている。本研究では、同地域における文化的景観保全と社会資本整備との整合性についても考察したい。

ご存じのように、「文化的景観とは、地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの」と、2005年（平成17年）4月1日に施行された文化財保護法第二条第1項第五号により定義された、日本で最も新しい文化財である。

その要件としては、①歴史、②自然環境、③生活・生業、が挙げられ、これらを保持する地域固有の景観生成メカニズムを文化財とするものである。この文化的景観を保全することは、

- ①地域固有の歴史、自然環境、生活・生業の総体として眼前に現れる
- ②具体的なモノばかりではなく、文化的景観の生成メカニズム（成り立つ仕組み）を、
- ③地域の様々な主体（地域住民、行政、アソシエーション）が協働し、先人から受け継いできた歴史的環境の中に見出し、
- ④その価値を発見、共有し、創造的に継承していくことである。

つまり、文化的景観保全は「地域に関わる人々が協働して行う、持続可能なまちづくり」そのものであると筆者たちは考えている。

本研究の目的は、南阿蘇地域の持続可能な発展を支える社会資本整備、地域システムづくりを進めるために、地域住民と地元自治体との協働のもと、文化的景観保全に関する要件を抽出することである。

1.2 本年度の調査内容

本研究の内容は、大別すると3種類に分かれる。

- 1) 文化的景観の基礎構造把握
- 2) 災害に着目した地域形成史
- 3) 交通基盤整備史及び観光資源整備史

1.3 調査対象地の概要

図1に南阿蘇村と合併前の旧3村の位置を示す。阿蘇カルデラの南部、阿蘇五岳と外輪山に挟まれた南郷谷に位置する南阿蘇村は、平成17年(2005年)2月13日に旧熊本県阿蘇郡白水村、久木野村、長陽村の3村が合併して発足した村である。平成12(2000)年の国勢調査による南阿蘇村の人口は12,436人、65歳以上の高齢者の割合は13.6%となっている。



図1 南阿蘇村旧村の位置（筆者作成）

2. 南阿蘇村の景観基礎調査

南阿蘇村を対象として、景観の基礎構造を理解するために、景観軸、土地利用、主要な景観構成要素などを把握する景観調査を行った。文化的景観の要件である、①歴史、②自然環境、③生活・生業に着目して調査した。

2.1 南阿蘇村の土地利用

現地調査と地形図に基づき、南阿蘇村の土地利用図を作成した(図2・図3)。白川を中心とする谷中央部には水田が広がっている。主な集落は、土地利用に着目すると水田地帯に位置しており、勾配の緩い山裾には畑地が見られる。南阿蘇村には主に檜等の樹林が多くみられ、原野や水田と共に土地利用の大部分を占めている。以上のように、南阿蘇村の土地利用は、白川の右岸に中央火口丘、左岸に外輪山があり、高度の高い所から、無草地帯、草原、森林、畑、水田(集落)、という土地利用構成となっている。

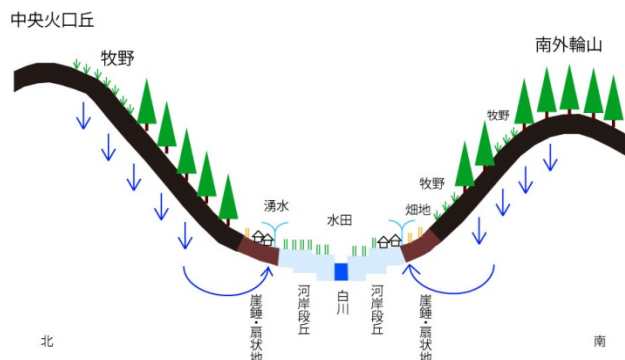


図3 南郷谷横断面の概念図



写真1 俵山からの南阿蘇地域の眺め

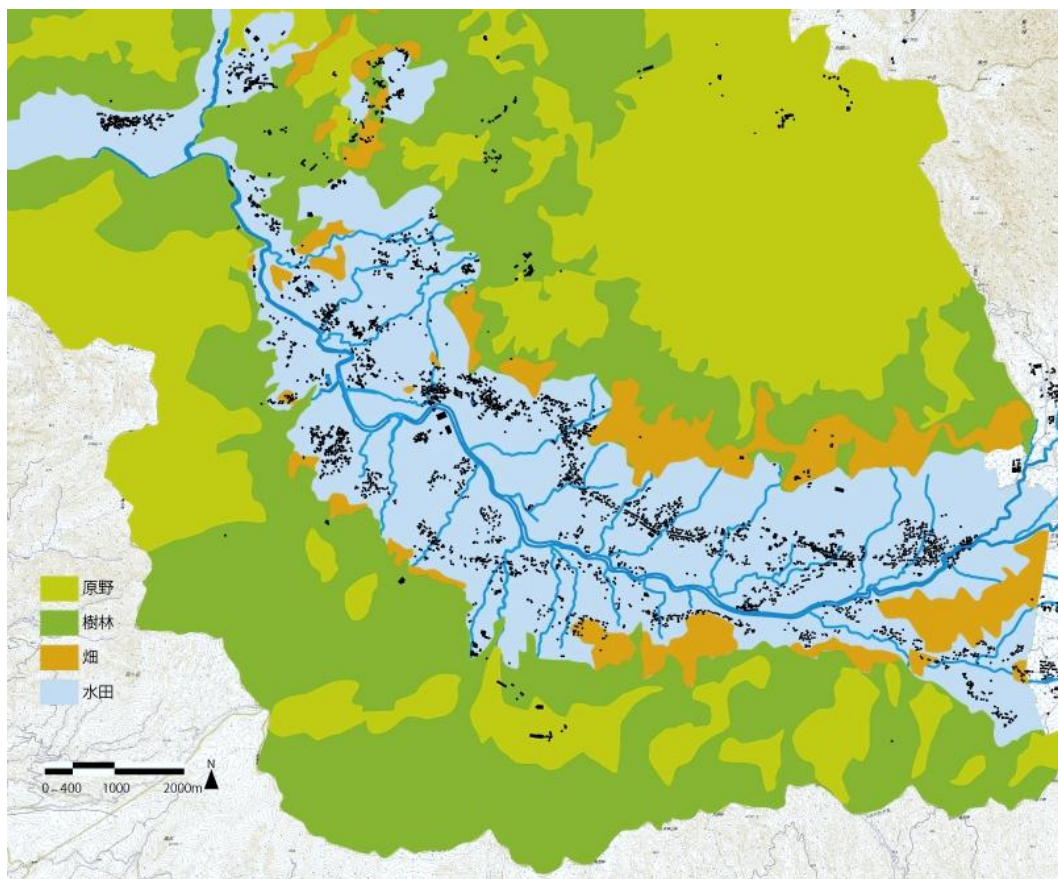


図2 南阿蘇村土地利用図(国土地理院1/25000地形図及び現地調査より作成)

図4 1948年被災前の集落状況

3. 6.26 水害と社会資本整備

南阿蘇地域の近代化過程において、非常に大きな変化をもたらした6.26水害に着目し、地域の人々の暮らしを支えてきた社会基盤施設や土木遺産との関係において、生活環境としての地域形成について調査した。

3.1 南阿蘇地域における災害の歴史

本研究にあたり、災害意識を読み解くため、災害意識に影響を与えた災害の事例を選択する。そこで本章では、南郷谷地域の災害履歴を整理し、災害の特性を分析する。その後、対象となる災害事例を決定し、対象災害における既存報告の整理を行う。

3.2 6.26 水害における被害状況の記録

ここでは、6.26水害発生時における集落の分析、本水害の被害状況について整理する。その後、被害地区と集落の関係について分析を行う。

(1) 災害発生前後の集落変化

6.26水害の発生前後の航空写真(図4・図5)、南郷谷の断面模式図を用いて集落位置の分析を行う。6.26水害の発生直前直後の比較において、集落位置に大きな変化は見られない。

南郷谷における集落の位置特性として、1)旧国道325号沿いに集落が集まっている。2)白川沿いに集落が存在する。3)畑と田の境界部に集落が存在する。

以上の3点が挙げられる。それぞれについて分析した結果を以下に記す。

①旧国道325号は当時、南郷谷地域において長陽村高森町をつなぐ主要道路であり、明治中期から大正期にかけて建設された。この道路は昭和3年に高森線(現南阿蘇鉄道)が通じるまで、代替の利かない道路であった。したがって、この道路周辺に集落が集まっていたと考えられる。

②南郷谷における住民の暮らしは、農業・畜産業と密着していた。農業を生業として暮らしていた人が大半を占めていた。南郷谷地域の農業について、特徴的な用水路の利用を考慮すると、この用水路は南郷谷に存在する各湧水地や白川を利用して作られている。そのため、用水路を利用して農作物を生産する農家は河川周辺に集まったと考えられる。

③南郷谷はカルデラ壁や中央火口丘の斜面崩壊による崖錘、扇状地と、白川の侵食作用による河岸段丘が形成されている。中央火口丘から大規模な土石流により形成された扇状地では、扇状地の末端に多くの湧水が分布しており、このような潤沢な水が得られる場所では水田耕作が行われている。一方で、扇状地上など表流水の乏しい場所は、畑作を中心とした畑作がなされていた。

(2) 被害状況図

南郷谷において最大の被害をもたらした6.26水害であるが、写真、文章で局所的な被害を伝える資料は多く存在するのに対し、その被害状況の全貌を空間的に示した資料は管見の限りでは存在しなかった。故に、文献調査と現地踏査、ヒアリング調査を行い、被害の実態を空間として示した。

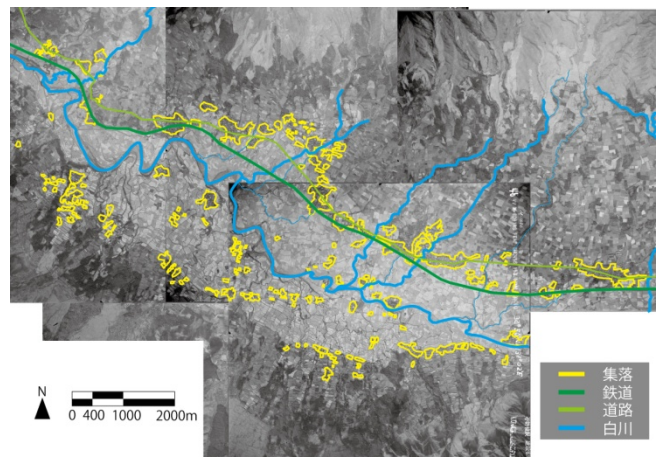
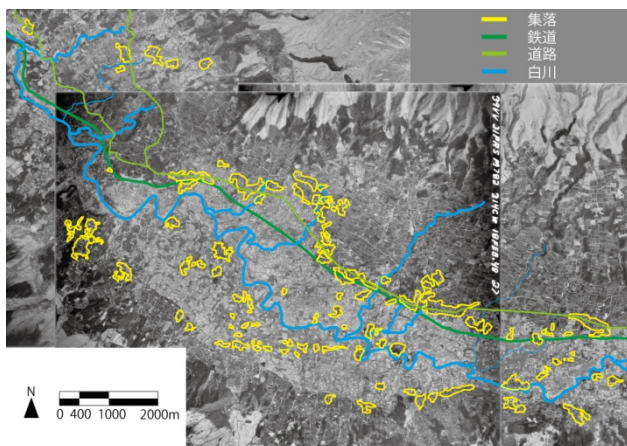


図5 1956年被災後の集落状況

4. 南阿蘇村における交通基盤整備史と観光地形成

阿蘇全体の交通基盤施設整備に関する土木史調査である。南阿蘇村については、文化的景観保全や活用、地域づくりの基礎資料として、観光を視野に入れ具体的な観光資源の整備状況も合わせて記述した。

4.1 阿蘇地域の交通基盤

南阿蘇村の交通インフラ整備の状況を図6に示す。南阿蘇村には、東端部の立野地域にJR豊肥本線が、立野から隣の高森町まで村を横断するように南阿蘇鉄道が整備されている。そして、南阿蘇鉄道に並行して、国道325号長陽白水バイパスと、県道28号俵山バイパスが整備されている。また、阿蘇山上に向かう阿蘇登山道路は、坊中線、赤水線、枋木線、吉田線の4つが整備されており、うち、村内を通過するものが3つである。



図6 交通インフラ整備状況（筆者作成）

4.2 阿蘇地域における交通基盤整備の変遷

表3に示した阿蘇地域全体の交通基盤整備の変遷を、以下に示した基礎文献に基づいて整理した。

- ・大阪毎日新聞社：『日本交通分縣地図 東宮御成婚記念 其33(熊本縣)』，大阪毎日新聞社，1928
- ・大阿蘇國立公園協會：『国立公園大阿蘇案内』，1936
- ・塔文社：『熊本県道路地図』，塔文社，1955
- ・熊本県：『熊本県総合管内図』，熊本県，1965

- ・人文社編集部：『熊本県広域道路地図』，人文社，1994
- ・熊本県阿蘇地域振興局：『鉄道で巡る南阿蘇の旅』，pp.2-19，2011
- ・熊本県阿蘇地域振興局：『鉄道で巡る南阿蘇の旅』付録『豊肥本線開通当時の阿蘇観光絵図(昭和3年頃)』，2011
- ・阿蘇町：『阿蘇町開湯100年ルネッサンス 阿蘇・内牧温泉ロマン』，pp.8-29，1999

変化点となるような基盤整備や、整備の特徴から交通基盤整備の変遷を4期に時代区分を設定し、各期の交通基盤整備の特徴を示した。

4.3 南阿蘇村の観光資源整備

本節では、村内に存在する観光資源を観光行動の性質により分類し、対象地の観光資源の分布状況と交通基盤整備の状況を示す。

まず、既往研究と南阿蘇村の歴史的展開を参考に、観光資源を表4に示した観賞型、健康型、教育型、行楽型、温泉の5タイプに分類した。なお、観光資源の抽出には、南阿蘇村が発行している観光マップを用いた。図7に観光資源の分布状況を示す。

第Ⅰ期から第Ⅲ期までは、行楽型の観光資源が阿蘇山上への登山道路沿いを中心に整備されたが、第Ⅳ期では、温泉を核にして、新たにバイパスの沿いやさらに内部の方へ観光地整備が移行している。

これにより、時代により、観光客の来訪目的や滞在時間も多様化し、観光地整備が多様化し、広域に展開していることが分かった。

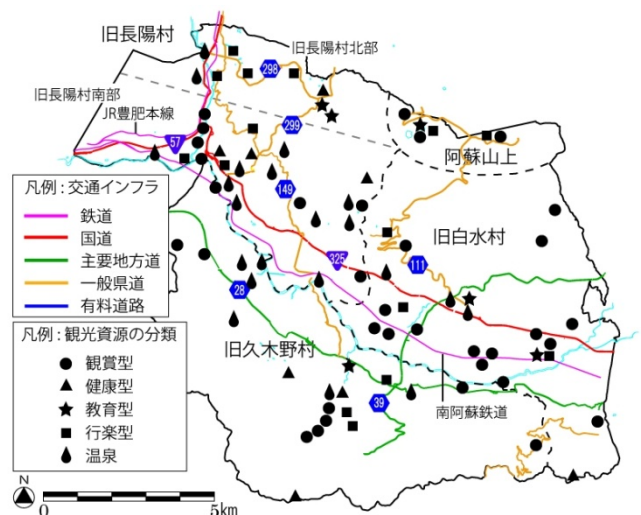


図7 観光資源の分布（筆者作成）

5. おわりに

5.1 研究のまとめ

以下に、本年度の研究成果をまとめる。

2章では、南阿蘇村の景観構造を調査した。南阿蘇村における景観の基礎構造を理解するために、景観軸、土地利用、主要な景観構成要素などを把握した。

景観軸や視点場については、南阿蘇村の有する雄大な地形を感じ取ることができる景観軸が多く存在し、その視点場が多く存在することがわかった。また、そのような雄大な地形を感じ取ることができる風景のなかにも、農作業など地域の暮らしぶりを感じ取ることができるということが南阿蘇の景観の特徴であると言える。集落には石碑や神社、湧水など歴史や文化を感じさせる要素が多く見られた。

3章では、南阿蘇地域における災害の履歴を整理し、同地域において重要な変化要因である 6.26 水害を取り上げ、その被害状況を可視化した。

4章では、阿蘇地域における交通基盤整備史、及び南阿蘇村を対象を絞って交通基盤整備と密接に結びついている観光地形成に関して調査した。阿蘇全体の交通基盤整備に関しては、4つの時代区分を設定し、それぞれの特徴を明らかにした。また、南阿蘇村については、文化的景観保全や活用、地域づくりの基礎資料となるよう、観光資源整備状況も合わせて調査し、交通基盤整備と観光地化との関係性について分析した。

5.2 今後の課題

文化的景観保全は、まちづくり活動と親和性がある。「まちづくり」とは、従来のトップダウン型の都市計画のイメージに対して、ボトムアップ型の、地域住民、行政（市町村や県、国）、アソシエーションの各ステークホルダーが積極的に参加し協働する、法制度のみならず様々な地域資源を活用しながら進める、終わりのない地域環境改善活動と定義する。そのために、図8に示した、地域づくりの各ステークホルダーが協働し、持続可能な地域づくりを実践していくための場づくりが肝要となる。

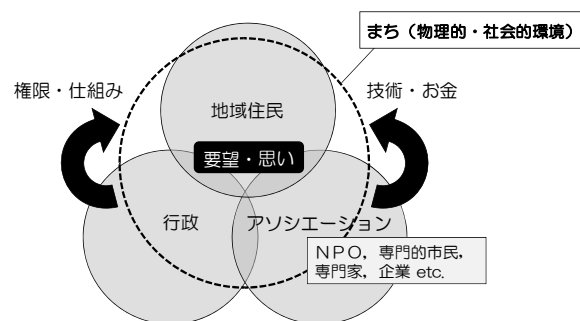


図8 まちづくりの定義